

平成25年度

東邦大学附属東邦中学校

前期入学試験問題

国 語

(100点 45分)

注 意

1. 監督者の「始め」の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題用紙は18ページあります。試験中にページの不足などに気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。
3. 監督者の「始め」の合図のあと、最初に受験番号と氏名を解答用紙のそれぞれの欄に記入しなさい。
4. 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
5. 問題用紙はどのページも切りはなしてはいけません。余白等は適当に利用しなさい。
6. 監督者の「やめ」の合図で筆記用具を置き、所持品はそのままにして、ただちに退室しなさい。
7. 問題用紙は持ち帰りなさい。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔質問〕 若い人が文末にやたらに「し」を付けて話すのが気になります。「し」をこのように使つてよいのでしょうか。

〔答え〕 「し」は、普通、「この本は安^①かだし、装丁も悪くない」のように、二つ以上の事柄を並べるのに使います。しかし、最近では、「なぜ、遅刻したんだ」「だって、雨も降つてたし。」のように、文末で理由を述べるのに使われることがあります。また、相手がばかげたことをしたときに、「わけわかんないし。」のように、文末で自分の気持ちをそのまま示すのに使われることもあります。

A、最初の理由を表す用法について見ていきましょう。若い人から「だって、雨も降つてたし。」と答えられると、年配の人は、ほかに何か理由があるのか、と問い直したくなります。「し」は事柄を並べるので、当然、ほかにも理由があるだろうと考えるからです。

では、年配の人は、これに類した表現はしていないのでしょうか。 B、「最近、A社との取引が減つたのはなぜか」と上司に聞かれたとします。「それなんです、先方の担当者も替わりまして…。」のように答えることもあるのではないのでしょうか。このとき、「他の理由は何か」などと (1) 即座に問い直されると考えているでしょうか。

「先方の担当者も替わりまして…」という答えと「先方の担当者が替わったからです。」という答えとを比べてみましょう。「し」から「を」を使うと理由をそれに限定して、他の理由を排除するのには、「して」だと、現時点の分析で考えられる理由を挙げたという※ニュアンスが感じられます。とりあえずの理由付けですから、より詳細な分析が出たり、もつと的確な理由が見いだせたら、撤回することもやぶさかでない、という意味合いももたらさ

れます。

この効果は、「して」で列挙する形をとることと、その最初のものとして「先方の担当者が替わった」という事柄を挙げる形にすることからもたらされます。最初に出されるものは、現時点で思いついたものであるとも、最も重要であると見なされたものであるとも解釈できます。列挙の形をとること、他の可能性も示唆されるのです。

(2) から「や」の「で」で理由を示すと、このような効果は期待できません。「担当者が替わりました」という状況は、「取引が減った」ことの一要因ですが、それにどう対処したかといったことも理由として考えられます。それを「担当者が替わったからです。」などと状況に限定して示すと、「そんなことが理由になるか、替わったら替わったなりのことをやれ」と言われてしまうでしょう。「担当者が替わりまして…」という答えは、それなりの対処もしているし、他の理由もあるかもしれないが、新しい担当者がなにしる難物で…といった含みがあるので、こうした文句もひとまずは避けられます(ただし、文末の「して」は、「こつち来て」といった命令や「もう、帰っちゃって」のような非難など、さまざまな表現にも使われます。「して」は、あくまで、文脈に支えられて、理由の列挙に用いられるに過ぎません)。

若い人たちが使う、理由を表す「し」も、これと同様だと考えられます。その時点の最も大きな理由を「し」で示しています。 C、とりあえずのものでそれを撤回する可能性は否定しない、という含みがあります。交際を申し込んで断られた相手に、どうして断るのかと質問して、「だって、好きじゃないし…」という答えが返ってきたとします。「好きではない」以上の理由などないはずですが、「し」を使うことで、とり

あえずの答えの形になっています。「好きじゃないから。」という答えと比べると、まだ、「し」で答えられたほうがダメージが軽減されませんか? (3) このような「し」は、聞き手に配慮した思いやりの表現だとも言えるでしょう。

「し」は、「て」のような臨時の形ではなく、「ので」や「から」では表せない部分を補っています。「明日、どうしましょうか」「いや、〇〇も××し」のような会話は、学校でも職場でも使われているでしょう。ここに「台風も近づいている」「^③監査もある」など、サイ考を促す一番大きな理由を入れて示す表現として、安定して使われているようです。

もう一つの、若い人が使う「わけわかんないし。」のような表現は、⁽⁵⁾理由の用法からさらにもう一歩進めた形です。「から」や「ので」には、「あんななんか、もう、知らないから。」とか「では、もう帰りますので。」のような自分の気持ちを伝える文末用法があります。これは、「あなたのことは考えない」とか「帰る」ということを理由にして、もう、この場でこれ以上の働きかけはないことを表します。「わけわかんないし。」もこれと同様に、現時点で自分は、相手の言動に対し「わけがわからない」という以上のコメントはないので、それ以上のリアクションは求めなくてくれ、ということなのです。

「し」の理由の用法は、まさに「D」の表現から生まれたものです。「から」や「ので」にない、さまざまな含みをもたらし、相手への思いやりの効果も出せます。しかし一方で、理由を限定することが求められている場面で「し」を使うと、その場しのぎの思いつきを述べているのではないかと、きつちりと決められない優柔不断な態度であると見なされたりすることもあります。「し」ばかり使うと、せっかくの効果も薄れてしまいます。「から」や「ので」と、うまく使い分けるようにしたいものです。

(北原保雄編『続弾！ 問題な日本語』より。出題にあたり、原文の表記を一部改めました。)

(注) ※ ニュアンス……あることばの持つ表面的な意味以外に感じられる微妙な意味。

問1 線①②③と同じ漢字を使うものを次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-----|---|-----------|---|------------|
| ① | 安カ | ア | カ否を論ずる。 | イ | 成カを収める。 |
| | | ウ | 対カを求める。 | エ | 体力をカ信する。 |
| ② | 要イン | ア | 敗インを考える。 | イ | 酸素を吸インする。 |
| | | ウ | 退インを喜ぶ。 | エ | 紅茶を愛インする。 |
| ③ | サイ考 | ア | 布地をサイ断する。 | イ | 民話をサイ集する。 |
| | | ウ | サイ礼をとり行う。 | エ | 名場面をサイ現する。 |

問2 A C にあてはまる言葉としてもっとも適切なものを次のア～カの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア まず イ なお ウ やはり エ まるで オ たとえば カ あたかも

問3 線(1)「即座に問い直されると考えているでしょうか」の表す意味としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 即座に問い直される考え方をしているわけではない。
 イ 即座に問い直されると考えているはずはない。
 ウ 即座に問い直されても考え方を伝えるべきだ。
 エ 即座に問い直されたらすぐに考える方がよい。

問4 線(2)『から』や『ので』で理由を示すと、このような効果は期待できません」の説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「て」によって理由を説明すると、列挙の形をとることによって現時点での思いつきであるというニュアンスを持たせながら、さまざまな理由を周囲の雰囲気ふんいきに合わせて詳細に説明することができる。このような効果は、理由をそれに限定してしまう「から」や「ので」を使って表現することはできない。

イ 「て」によって理由を説明すると、現時点の可能性として考えられるとりあえずの理由を述べた上で、これから詳しい分析くわや的確な理由を追求していくことを相手に伝えていさかいを避けることができる。このような効果は、理由をそれに限定してしまう「から」や「ので」を使って表現することはできない。

ウ 「て」によって理由を説明すると、今考えられる理由を挙げてみたという含みを感じさせると同時に、事柄を並べる形をとることによって、最も重要な理由であるかもしれないという可能性をほのめかすこともできる。このような効果は、理由をそれに限定してしまう「から」や「ので」を使って表現することはできない。

エ 「て」によって理由を説明すると、その理由には複数の可能性が存在するのだというニュアンスを感じさせる効果があり、さらにその複数の可能性はどれも自分の現時点で考えられる理由にはあてはまらないことを表現できる。このような効果は、理由をそれに限定してしまう「から」や「ので」を使って表現することはできない。

問5 線(3)「このような『し』は、聞き手に配慮した思いやりの表現だとも言える」とありますが、これは「し」にどのような働きがあるからですか。そのことを説明した次の文の□にあてはまる言葉を本文中から二十五字以内でぬき出し、最初と最後の三字ずつを答えなさい。(句読点、記号等も字数に数えます。)

理由を表す「し」には□といったニュアンスを聞き手に感じさせる働きがあるから。

問6 線(4)「し」は、『て』のような臨時の形ではなく、『ので』や『から』では表せない部分を補っています」について、次のⅠ・Ⅱに答えなさい。

Ⅰ 「臨時」は、どのような意味ですか。もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さしあたって イ なにはさておき ウ 予想に反して エ まず第一に

II 「し」が補っているのは、どのような表現ですか。もっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 聞き手に対する思いやりの気持ちを表しながらも、理由付けをして拒否きよひしたい心情をなんとか伝えようとする表現。
- イ ある事柄に対してさまざまな理由付けを考えることはできるが、あえてその理由を一つにしほりこもうとする表現。
- ウ さまざまな事柄を取りあげながらそれぞれの理由はあげず、一番大きな理由だけで相手を納得なっとくさせようとする表現。
- エ いくつかの事柄が存在するという含みを持たせながら、最大の理由を示して考え直すようにしむけようとする表現。

問7 線(5)「理由の用法からさらにもう一步進めた形」とは、どのような表現であると考えられますか。そのことを説明した次の文の□にあてはまる言葉を本文中から五字でぬき出して答えなさい。

「～から」や「～ので」と同様に、自分からの積極的な働きかけはないことを表現し、□との関わり合いを避けたいという気持ちを伝える表現。

問8 □Dにあてはまる言葉としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 親愛 イ 余情 ウ 不確実 エ 不正確

問9 ……線「若い人が文末にやたらに『し』を付けて話すのが気になります。『し』をこのように使ってよいのでしょうか」という質問に対して、筆者はどのような考えを述べていますか。もっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 若い人が「し」を多用している現状は、しかたがない。しかし、「し」では理由の列挙に終わってしまふため、真意が伝わらなくなる可能性も否定はできない。したがって、「し」のもたらす効果を生かすためには、場面に応じて他の文末表現と使い分けをすることが重要だ。
- イ 若い人が「し」を多用している現状を、否定はしない。しかし、「し」はさまざまな含みをもつ表現であるため、話し手が状況に応じた使用を心がけないと誤解を招くこともある。「し」のもたらす効果を生かすためにも、場面に応じて他の文末表現と使い分けをすることが重要だ。
- ウ 若い人が「し」を多用している現状を、否定できない。なぜなら、「し」は聞き手に配慮した思いやりの心を表現できるため、人と人との関係をよりよくする言葉だからである。ただし、「し」のもたらす効果を生かすためには、場面に応じて他の文末表現と使い分けをすることが重要だ。
- エ 若い人が「し」を多用している現状には、賛成できない。なぜなら、「し」では理由を限定することのできないため、他人から優柔不断な性格だと判断されてしまうこともあるからである。「し」のもたらす効果を生かすためにも、場面に応じて他の文末表現と使い分けをすることが重要だ。

二 次の文章は、武士の身分を捨てて植木屋になった徳造という男の物語である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

植木屋になつてから徳造が最も精を出したのは、儲けることでも店を広げることでもなく、これまで誰も造つたことがないような変わり咲きを生み出すことだった。それも朝顔や菊といった多くの職人が工夫を凝らしてきつた筋のものには目もくれず、桜ばかりにこだわった。徳造はそのわけを、一度仲間に語ったことがある。

「(1)庭じゃあなく、景色を造りたいと思つてね」。彼は、暇を見つけては方々の山桜を見て歩き、よさそうな品種を見極め、その枝を持ち帰つて接ぎ木や挿し木にした。彼の家の前には、そういう桜の鉢がいくつも並んでいた。一度、徳造が店から帰ると、^{※1}お慶がその桜の鉢の前にジツとしゃがんでいたことがあった。彼女がそんな風に草木に興味を示すのははじめてのことだったから、徳造は急いで駆け寄り「新しく掛け合わせた桜だ。これがうまいければそりゃあ見事な花が咲くよ」と弾んだ声で言った。お慶は顔を上げず、まばたきもせずに桜を見ていた。それから誰に言うともなく、

「あたしは、どこかで、しくじつたんだね」と呟いた。

徳造はそれから、これまで以上に掛け合わせの桜に没頭するようになった。お慶が針仕事に没入するのと同じような気の入れ方で、すべてを桜に注ぎ込んだ。植木屋仲間が交配の進み具合を訊くと、江戸彼岸という品種を使うことにしたのだと⁽²⁾内緒話でもするように徳造は打ち明けた。

「今度はうまくいきそうだ。そうすれば万事元通りになるんだよ」

「元通りって、なにがだい？」と仲間は訊いたが、徳造は、うっかり漏らしてしまった言葉をこまかすように、「早いとこ、いい桜が^{※2}めつかるといいんだが」

と、静かな笑みを浮かべた。

「めつかるって、変わり咲きは掛け合わせをして兄が造るんだから、『めつける』じゃあねえだろう」

仲間が笑うと、徳造は真面目な様子で否定する。

「(3)いやあ、『めつける』だ。道筋はつけられても、もともと天然自然のものはなから造るなんてできないもの。こいつらの出方を見て、いい姿をめつけるんだよ」

そこにいた誰もが、徳造の顔を不思議そうに眺めた。そのうちのひとりが、「面倒だなあ、⁽⁴⁾兄いは面倒だ」と呆れたように言った。

徳造が、江戸彼岸と大島桜を掛け合わせた変わり咲きの桜を「めつける」ことを成し遂げたのは、それからさらに五年が過ぎた頃のことだ。葉が出るより先に、淡雪に似た花が枝をほぐすようにして咲き乱れる桜を見た仲間たちは、一様に息を呑んだ。

徳造の桜は、吉野桜と呼ばれ、すぐに評判となった。

「移ろうから、儂いから、美しい」

一斉に咲いて見事に散る様も際だつているその桜を、⁽⁵⁾江戸の人々は自らの生き方になぞらえて愛でた。ひとひらひとひらが、風に舞つて吹雪に似た風情を作ること、人々を魅了してやまなかつた。

桜を造つた徳造の名は広く知れ渡り、巨万の富がもたらされる——当然そうなるはずだった。にもかかわらず、徳造の暮らしはなにひとつ変わらなかつた。金回りがよくなるわけでも、人々から注目を浴びるわけでもなかつた。

彼は、自分が編み出した桜の苗を、誰にでもほんのわずかな値で分けてしまつていたからだ。新種の桜にその名を冠することもなければ、己の仕事だと吹聴することもない。だから新しい桜を売っているこの人の良さそう

な男が、交配を見つけたその人だとは誰も思わなかったろう。

植木屋仲間はさすがに徳造を諫めた。なにしろ、他人から訊かれれば、苦心して編み出した掛け合わせの方法まであっさり教えてしまうのだから。せっかく評判になったんだ、それなりの値をつけなければ、掛け合わせに費やした手間暇も歳月もふいになる、と彼らは口を極めて言った。ところが当の本人は(6)柳に風で、自分のこめかみあたりをトントンと二度ほど叩き、「なに、ここにあるものを口から吐き出しているだけで、なんの元手も掛かっちゃいねえもの」と(7)嘯くのだった。そんなことを続けていけば、来年にはもう、徳造の桜は誰のものでもなくなってしまう。痺れを切らした仲間数人が、(7)徳造の家まで談じに行つた。

「兄いも、朝顔の珍花で売つた成田屋を知っているだろう？」
ひとりの若者が切り出した。徳造はみなが訪ねてきたわけを悟り、困じ果てた顔になった。座敷の隅ではお慶が、連中のことなど目に入らないといった様子で針仕事をしている。

「金を取る気がないなら、せめてこの桜に(8)銘打つなりなんなりしねえと、兄いの名だつて広まらねえだろう」
年かきの男が続き、「別段それは(9)浅ましいことでもなんでもないんだ」と穏やかな声で諭した。

「いくら草木が好きだといつて、それだけで生きていかれるわけじゃあない。それを見も知らぬ客に売つぱらつて、わつちらおまんまが食えているんだ。ちゃんと育ててくれるのかわからねえ客にだよ、そういう割り切つたところがあるのが商売というものだ」

徳造は口に溜まつた唾を何度も飲み込んで、額や頬の辺りをしきりと搔いていた。

「だつたら染井吉野つてのはどうだろうね。(10)染井でできた桜だからね。そら、奈良にも吉野桜つてのがあるだろう。これはそいつと違う種だから」

「(8)そういうことじゃないんだよ、兄い」
仲間は口々に言う。

「兄いが造つたつてことを、もつと大つぴらに触れ回つたほうがいいつてことさ。そうすりゃこれから、商売だつてしやすくなるだろう。頼まれる仕事だつて増えるかもしれないよ」

(9)そのとき、お慶が手元から目を上げて、徳造の背中をそつと見遣つた。けつして動かないはずのものが不意に動いたことに、そこにいた職人の何人かが気付いた。彼らは、ある期待を込めてお慶を見つめた。「でもなあ」と徳造の口が先に開いた。

「確かに花は、名花だ駄花だと区別もされる。それでもな、花を見る者はなんにも書かれていねえ生きた姿に惚れるんだ。そこにわざわざ俺の名を冠すようなことは、野暮じゃあないかと思つてね」

餅でも噛んでいるようなくもつた声で答えた。仲間は口々に「そりゃそうなんだが」と唸り、徳造のこれまでの控えめすぎる行いを並べ立てて案じ、今度ばかりはその人の良さは忘れて堂々と銘打て、掛け合わせのやり方だつて他に教えず苗だけ売ればいいんだと、くどいくらいに焚きつけた。この桜は後世にまで語り継がれるほどの代物なんだよ、と。徳造は仲間の親身な言葉をひとつひとつ身体にすり込むようにして聞いていた。それでも一通り聞き終えると、やっぱり首を横に振つた。

「なにも遠慮しているわけじゃあないんだ。そうやってせっかくの技を抱え込んだら、広まるものも広まらないだろう。あの桜が広まらないのは、俺には一番こたえるからさ」

(10)そのときにはお慶はもう、職人たちに背を向けて、いつもと同じ姿勢で針を動かしていた。

(木内昇「染井の桜」)

- (注)
- ※1 お慶……徳造の妻。徳造が植木屋になって以来、人が変わったように陰気な性格になった。
 - ※2 めっかる……見つかる。「めっける」は見つける。
 - ※3 嘯く……とほける。
 - ※4 銘打つ……名前をつける。
 - ※5 柴井……現在の東京都豊島区駒込^{としま こまごめ}周辺をさす地名。

問1 〰〰〰線 a 「際だって」、b 「浅ましい」は、どのような意味ですか。もっとも適切なものを次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|------|---|------------|---|------------|
| a | 際だって | ア | 特に変化に富んで | イ | はっきり目立って |
| | | ウ | 人の心をとらえて | エ | たいへんすぐれて |
| b | 浅ましい | ア | 思い上がった身勝手な | イ | 考えが足りず非常識な |
| | | ウ | 意地きたなく見苦しい | エ | はずかしくて情けない |

問2 〰〰〰線(1)「庭じゃあなく、景色を造りたいと思つてね」とありますが、この言葉に込められた徳造の気持ちとしてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 個人の庭に置かれるちつぽけな植木ではなく、いずれは広大な山林に成長できる植木を造りたい。

イ どの庭にもあるようなありきたりの植木ではなく、独創的な美観をつくり出す植木を造りたい。

ウ 四方を囲まれた庭で閉じこめられて生きる植木ではなく、自然にのびのびと育つ植木を造りたい。

エ 人工的な庭で一年中変化のない姿を見せる植木ではなく、四季折々の変化に富む植木を造りたい。

問3 〰〰〰線(2)「内緒話でもするように徳造は打ち明けた」とありますが、この時の徳造の気持ちとしてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア この掛け合わせが成功すれば、妻のお慶もきつと喜んでくれるだろうという気持ち。

イ ようやく長年の夢がかないそうになってきて、はやる心をおさえようという気持ち。

ウ 仲間には強気で言ったが、内心はほんとうにうまくいか自信がないという気持ち。

エ 今度こそ大金持ちになれる絶好の機会なので、他人に知られては困るという気持ち。

問4 ——線(3)「いやあ、『めっける』だ」とありますが、ここに表れている徳造の考え方の説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自然を造り出したり造り変えたりすることは神の領域であり、人間が自然を造るなどという大それたことをしてはいけないという考え方。

イ 自然はありのままの姿が最も美しいのであり、人間が自然を勝手に造り変えたりしたらその美しさが台無しになってしまうという考え方。

ウ 人間のやるべき仕事は良い性質の自然を造ることではなく、自然本来の性質を見分けて良い性質を伸ばしていくことだという考え方。

エ 人間が自然を思い通りに造ることなどできるわけがなく、人間ができることはただ自然を注意深く観察することだけだという考え方。

問5 ——線(4)「兄いは面倒だ」とありますが、どのようなことに対して「面倒だ」と言ったのですか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 徳造がいつも意地をはって反対の意見を言うこと。

イ 徳造ががんこでむずかしい理くつを並べたてること。

ウ 徳造がかしこくて次々に新しい考えを打ち出すこと。

エ 徳造が植木屋の仕事を少しも理解しようとしないうこと。

問6 ——線(5)「江戸の人々は自らの生き方になぞらえて愛でた」とありますが、どのような気持ちで「愛でた」のですか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人の世は常に移り変わり人生も永遠ではないという思いと共通するものとして、咲いたと思う間に散ってしまう桜の姿に共感を覚えた。

イ ひらひらと舞い散る桜の姿を見て、自らも風にふかれてただよう花びらのようなたよりない人生を送っていると感じて親近感を持った。

ウ 一斉に咲き散っていく桜の姿を見て、人は一人で生きているのではなく助け合って生きているのだということに気づき心を動かされた。

エ 戦乱の続く時代にいつも死と向かい合わせに生きてきた人々が、いさぎよく散っていく桜の姿に理想の生き方を見いだしてあこがれた。

問7 ——線(6)「柳に風」は、どのような意味ですか。もっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手の話を真剣に聞こうとしないようす。

イ 素知らぬ態度でごまかそうとするようす。

ウ 相手に逆らわずさりと受け流すようす。

エ 手ごたえが全くなって効果がないうす。

問8 ——線(7)「徳造の家まで談じに行った」とありますが、その理由としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 徳造の商売に対する無関心さを放ったままでは、自分たちまでも大損すると考えたから。
- イ 徳造のあまりにも無欲な態度を見るに見かねて、何とかして改めさせたいと考えたから。
- ウ 徳造の身勝手な言い分に腹を立てて、これ以上いっしょに仕事はできないと考えたから。
- エ 徳造の困り果てたようすに、植木屋仲間として力を貸さなければならぬと考えたから。

問9 ——線(8)「そういうことじゃないんだよ」とありますが、「仲間」たちと徳造の考え方の違いを説明したものとしてみっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「仲間」たちは、植木屋は草木が好きなかただけでは生きていけず大切に育てた植木を商品として売つぱらうのが仕事だと考えているが、徳造は、自分の育てた植木にそんな冷酷なことはできないと考えている。
- イ 「仲間」たちは、生まれてきた新しい品種にちゃんとした名前をつけるのが植木屋としての義務だと考えているが、徳造は、名前などない方が人々そのままの美しい姿を見てほめてくれると考えている。
- ウ 「仲間」たちは、苦心して造った植木を簡単に人手に渡さないでもっと高い値で売りこむべきだと考えているが、徳造は、植木屋は天から授か^{さず}った花や木が相手なのだから謙虚な姿勢が必要だと考えている。
- エ 「仲間」たちは、植木屋は商売であり造った植木を売って金をもうけるのが当たり前だと考えているが、徳造は、自分が苦心して造った植木をなるべく大勢の人に楽しんでもらうことが大切だと考えている。

問10 ——線(9)「そのとき……」、(10)「そのときには……」とありますが、このときのお慶の気持ちの変化を説明したものとしてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 徳造が金もうけにはしるのではないかと不安に思ったが、その心配が全くと分かって安心した。
- イ 徳造が仲間たちの意見を聞かないので歯がゆい思いをしていたが、徳造の本心を聞いて心を打たれた。
- ウ 徳造が自分たちの生活のことを考えてくれると期待したが、徳造にその気がないことを知って失望した。
- エ 徳造が一人前の植木屋になるように後押ししようと思ったが、徳造にはその才能がないのだとあきらめた。

問11 本文の説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 植木屋に転向した徳造と妻のお慶が、慣れない世界で苦勞を重ねながらも周囲の植木屋仲間たちとの交流を深めていく様子を、新種の桜の発明という出来事と重ね合わせて多面的にえがいている。
- イ 新種の桜の発明という歴史的事実を背景として、桜の掛け合わせに情熱を注ぐ徳造という植木屋職人を中心に、妻のお慶、徳造の植木屋仲間たちがいざ三者三様の思いをあざやかにえがいている。
- ウ ただの植木屋職人にすぎない徳造が新種の桜を発明するまでの過程を追いながら、徳造の目を通して妻のお慶や植木屋の仲間たちに代表される江戸時代の人々の生きざまをいきいきとえがいている。
- エ 新種の桜の発明というすぐれた業績を残しながらもその価値に気づいていない徳造のおろかさを、徳造の植木屋仲間や妻のお慶といった周囲の人間と対照させながら皮肉たっぷりえがいている。



問10	問8	問6	問4	問2	問1
					a
問11	問9	問7	問5	問3	b

--	--	--	--	--	--

二の得点



問8	問7	問6	問5	問3	問2	問1
		I	最初		A	①
問9		II	最後	問4	B	②
					C	③

--	--	--	--	--	--	--

一の得点

受験番号
氏名

総得点